

第 38 回十勝農協連海外農業研修視察

カナダ農業研修視察報告書

2015 年

7 月 7 日(火)～7 月 17 日(金)

十勝農業協同組合連合会

発 刊 に あ た っ て

十勝農協連海外農業研修視察は、海外の生産現場などの研修視察を通じて、農業生産水準の向上を図り、十勝農業の発展に寄与することを目的に、昭和 51 年から実施しています。第 38 回となる今回は、TPP 交渉相手国であるカナダの農業情勢の研修を目的に、管内 8 農協の役職員 19 名に事務局・添乗員を含めた総勢 21 名で訪問しました。

最初に訪問した東部地域は、トロント・オタワといった大都市を抱えているため、野菜などの都市近郊型品目や、国内市場向けの酪農業が盛んな地帯です。続いて訪問した中西部地域は、世界有数の大規模畑作地帯として知られています。農業の基盤が異なることから、両地域は同じ国内にあっても農業政策に対する考え方が違っており、特に TPP 交渉については、国内市場をマーケットしている東部地域では反対、農産物輸出の多い中西部地域では賛成と正反対で、決して一枚岩で交渉に望んでいるわけではないことを理解することができました。

また、農業国として認知されているカナダですが、東部地域では都市部への人口集中と農業後継者不足の問題に直面している一方で、近年「食の安全」に関心をもつ消費者が増えてきており、有機栽培も盛んになりつつあるとのことで、我が国と同じ問題を抱え、進む方向を模索しておられました。また、中西部地域で訪れた生産者団体では、会員の方々との交流の場を設けていただき、ざっくばらんな雰囲気の中で意見交換できたことは、これからの十勝農業にとって大きな収穫であったと思います。

世界の食料をめぐる情勢は、主要な生産国の異常気象などによって供給力に翳りがみられるなか、中国などの消費は増大傾向にあり、需給の逼迫感が増しております。国民に安全・安心な食料を安定的に供給していくことは農業者の責務であります。そのためには農業者が安心して生産に打ち込める環境を整えていく必要があります。この研修視察が、少しでもその役に立てばと考える次第です。

結びに、研修視察の実施に際して格別なるご協力を賜りました関係各位に心より感謝申し上げますとともに、海外の農業事情を紹介した本報告書が十勝農業発展の一助となれば幸いに存じます。

平成 27 年 11 月

十勝農業協同組合連合会
代表理事会長 山本 勝博



笠松 立川 中嶋 山本 西田 山田 松久 長崎
太田 山下 薩田 高橋 植田 岡崎
澤田 川初 石川 菊地 青山 岸塚 藤村

とちぎ帯広空港にて 2015年7月7日(火)

目 次

I	はじめに	1
II	第 38 回十勝農協連海外農業研修視察団名簿	2
III	研修視察日程	4
IV	研修視察報告	
(1)	Ontario Federation of Agriculture (Guelph) オンタリオ農業連合 (オンタリオ州の農業情勢)	6
	Ontario Soil and Crop Improvement Assn. (Guelph) オンタリオ土壌・作物改良協会 (オンタリオ州の環境政策)	
(2)	Sharpe Farm (Guelph) シャープ農場 (大規模肥育農場)	8
(3)	Foundation Genetics (Guelph) ジェネティクス財団 (酪農サービス会社)	10
(4)	Clvermead Farm (Guelph) グルーバーミード農場 (家族経営酪農家)	12
(5)	Univercity of Guelph Muck Crops Research Station (Guelph) ゲルフ大学 泥炭作物研究拠点	14
(6)	Holland Marsh Grower's Assn. (Holland Marsh) ホランドマーシュ野菜生産者協会	16
(7)	Stanford Farm (Lethbridge) スタンフォード農場 (小麦生産農場)	18
(8)	Potato Growers of Alberta (Lethbridge) アルバータ馬鈴しょ生産者組合	20
(9)	Wind Farm (Lethbridge) ウィンド農場 (馬鈴しょ生産農場)	22
(10)	Grandville Island Public Market (Vancouver) グランヴィルアイランド公設市場	24
V	団員所感	26
VI	視察国の農林水産業および農林水産物貿易の概要	45

I はじめに

第38回十勝農協連海外農業研修視察では、7月7日から17日までの11日間、農協役員15名、農協職員4名、十勝農協連(事務局)1名、農協観光(添乗員)1名の計21名の団員で、カナダのオンタリオ州、アルバータ州の農業の生産現場を中心に現地視察して参りました。

カナダは日本とのTPP交渉相手国のひとつであります。小麦、豚肉、牛肉等の輸出大国として自由貿易を志向する反面、WTOドーハ・ラウンド交渉以前からこれまでのすべての通商交渉において、牛乳・乳製品、鶏肉、七面鳥、鶏卵、種卵の5品目にかかる供給管理制度を堅持し、TPP交渉においてもその姿勢を貫いています。こういった国際交渉をこれまで何度も経験してきた国において、現地を視察し、農業者及び関係者の話を伺えたことは、これから日本農業が国際社会とどのように関わっていくべきかを考える上で、団員にとって大変貴重な経験となりました。

今回訪問したオンタリオ州ゲルフ市、アルバータ州レスブリッジ市は北海道とほぼ同じ緯度にあり、気候的にも非常によく似ています。研修中は初夏の季節で天候にも恵まれたため、順調に研修の行程を進めることができました。

まず視察訪問したオンタリオ州では、トロントやオタワなどの大都市を抱えており、園芸、野菜といった都市近郊品目や、国内市場向けの酪農、養鶏、鶏卵など供給管理品目の生産が盛んに行われております。一方で、その後訪れたアルバータ州では、広大な土地、長い日照時間、豊富な水資源に恵まれていることから、世界でも有数の穀倉地帯となっており、小麦や大麦、キャノーラ(菜種)などが大量生産され、また豊富な飼料を背景とした牛肉生産が盛んに行われております。このように同じ国内であっても、農業形態には大きな違いが見られたため、今回の研修行程では見識を広めるという意味で大変有意義でした。

カナダは大規模農業のイメージが強く、農業経営者は利益追求にこだわる意識が強いのかと思われましたが、意外にも近隣農家や消費者との信頼関係を非常に大切に考えており、根幹的には人とのつながりがあるからこそ農業が成り立つという考え方に国境は関係ないのだと、改めて認識致しました。

最後になりますが、今回の海外農業研修視察に送り出してくださいました各農協、十勝農協連、農協観光等、関係各位の皆様には深くお礼を申し上げます。また、皆が元気で研修を終え、無事帰国できましたことは団員皆様と関係者のご協力の賜物と感謝申し上げます。

第38回十勝農協連海外農業研修視察団
団長 菊地 安好 (陸別町農業協同組合)

Ⅱ 視察団名簿

2015年7月7日現在

No	氏名	農協名	役職名	摘要
1	きくち やすよし 菊地 安好	陸別町農協	前理事	団長
2	いしかわ ゆきお 石川 幸雄	十勝高島農協	管理係長	副団長
3	あおやま てつお 青山 哲男	帯広大正農協	常務理事	
4	きしづか たかし 岸塚 隆司	帯広大正農協	理事	
5	やまもと ゆうじ 山本 裕慈	帯広大正農協	理事	
6	にしだ たかなお 西田 高尚	帯広大正農協	理事	
7	やまだ こうじ 山田 幸司	帯広大正農協	理事	
8	ふじむら としのり 藤村 敏則	帯広大正農協	常勤監事	
9	おおた ふくじ 太田 福司	大樹町農協	理事	
10	やました ぜんいち 山下 善一	大樹町農協	理事	
11	たかはし しんいつ 高橋 伸逸	大樹町農協	企画管理課 (大樹貨物出向)	
12	たちかわ ひろみつ 立川 博光	大樹町農協	燃料課 主査	
13	さった ひろひで 薩田 裕秀	音更町農協	理事	
14	なかじま やすひろ 中嶋 康裕	音更町農協	理事	
15	さわだ たかし 澤田 孝	札内農協	理事	
16	ながさき しのぶ 長崎 忍	幕別町農協	理事	

No	氏 名	農 協 名	役 職 名	摘 要
17	うえだ よしたか 植田 義隆	幕別町農協	理 事	
18	まつひさ みつる 松久 充	十勝池田町農協	施設課 技術課長	
19	かわはつ ひろし 川初 博司	陸別町農協	理 事	
20	おかざき ともや 岡崎 智哉	十勝農協連	農産化学研究所 主 幹	事務局
21	かさまつ たかし 笠松 孝司	(株)農協観光 帯広支店		添乗員



ナイアガラ公園内の花時計にて

Ⅲ 視察研修日程

	月日	都市名	現地時間	交通機関	行程
1	7月7日 (火)	帯広空港発 羽田空港着 羽田空港発 トロント空港着 ゲルフ市内	14:00 15:40 17:40 16:45	JL572 シャトルバス AC006 専用車	13:00～結団式（帯広空港会議室） 国内線にて、羽田空港へ 着後、国際線ターミナルへ移動 エアーカナダにて、空路トロントへ ・・・・・・・・日付変更線通過・・・・・・・・ 到着後、ゲルフ市内ホテルへ 【ゲルフ 泊】
2	7月8日 (水)	ゲルフ近郊	午前 午後	専用車	① オンタリオ農業連合及び土壌・作物改良協会 ② Sharpe Farm（大規模肥育農家） 【ゲルフ 泊】
3	7月9日 (木)	ゲルフ近郊	午前 午後	専用車	③ ジェネティクス財団（酪農サービス会社） ④ Gilvermead Farm（家族経営型酪農家） 【ゲルフ 泊】
4	7月10日 (金)	ゲルフ近郊	午前 午後	専用車	⑤ ゲルフ大学 泥炭作物研究拠点 ⑥ ホランドマーシュ野菜生産者協会 【ナイアガラ 泊】
5	7月11日 (土)	ナイアガラ	終日	専用車	ナイアガラの滝観光 【ナイアガラ 泊】
6	7月12日 (日)	ナイアガラ トロント空港発 カルカリー空港着 レスブリッジ	朝 12:00 14:15	専用車 AC173 専用車	朝食後、陸路にてトロントへ移動 国内線にて、西部地区カルガリーへ移動 着後、レスブリッジへ移動（約2時間弱） 【レスブリッジ 泊】
7	7月13日 (月)	レスブリッジ	午前 午後	専用車	⑦ Stanford農場（大規模畑作農家） ⑧ アルバータポテト生産者協会 ⑨ Wind農場（大規模畑作農家） 【レスブリッジ 泊】
8	7月14日 (火)	レスブリッジ カルカリー空港発 バンクーバー空港着	午前 14:15 14:44	専用車 AC217 専用車	午前、カルガリーへ移動 国内線にて、バンクーバーへ移動 着後、市内見学後、ホテルへ 【バンクーバー 泊】
9	7月15日 (水)	バンクーバー バンクーバー空港発	午前 13:40	専用車 AC003	⑩ グランヴィルアイランド公設市場 視察後、空港へ 空路、帰国の途へ ・・・・・・・・日付変更線通過・・・・・・・・ 【機中 泊】
10	7月16日 (木)	成田空港着 成田空港発 成田市内ホテル着	15:20 16:30 17:00	シャトルバス	到着後、入国審査 着後、シャトルバスにて成田市内ホテルへ 【成田市内ホテル 泊】
11	7月7日 (火)	成田市内ホテル発 羽田空港着 羽田空港発 帯広空港着	9:00 10:30 11:40 13:15	貸切バス JL575	貸切バスにて羽田空港へ移動 国内線にて、帯広空港へ 到着後、解散

《 航 路 図 》



ナイアガラの滝

IV 研修視察報告

※注 単位換算

1 カナダドル (CAD) ≒ 99 円

1 エーカー ≒ 40a

(1) Ontario Federation of Agriculture, Ontario Soil and Crop Improvement Assn. (オンタリオ州ゲルフ市)

オンタリオ農業連合 (OFA)、オンタリオ土壌・作物改良協会 (OSCIA)

説明者：ピーター シカンダ 氏 (OFA 農業政策研究員)

マーガレット メイ 氏 (OSCIA 地域指導員)

執筆者：澤田 孝 (札幌農協) 岡崎 智哉 (十勝農協連)



カナダに到着した翌日、ホテル会議室において、オンタリオ農業連合およびオンタリオ土壌・作物改良協会より、各組織の業務内容、またオンタリオ州における農業情勢について話を伺いました。

まず始めにシカンダ氏より、オンタリオ農業連合(OFA)の取組みについて説明がありました。OFAは1936年に農家のための組織として設立され、州内約37,000戸の生産者を会員に持つ、カナダでも最大の農業組織であるそうです。カナダというと農業大国であることから、大規模農業のイメージが強いですが、会員の約99%は家族経営とのことでした。また近年、オンタリオ州では日本と同様に離農者が増加傾向にあり、離農の原因としては、経営者の高齢化(州内農家の平均年齢は55歳)や大規模農場による買収が進んでいることにあるようです。ただし、農家戸数は年々減少しているものの、生産量では横ばいかやや伸びている傾向であるとのことでした。

OFAの組織はオンタリオ州52郡の中から選出された18名の理事、また21名の現場スタッフ、さらに6名の研究員で運営されています。組織の活動費は会員より年会費として徴収しており、経営規模に関らず、1戸当たり年間で200カナダドルを支払っているそうです。

OFA のおもな活動内容は、国や州政府との政策交渉、会員への農業政策の情報提供、消費者への広報活動、新規就農者の誘致活動などを行っています。また、シカンダ氏の業務内容について伺ったところ、主に農場での労働環境や安全衛生、自然災害対策について携わっており、具体的には、各方面から寄せられてくる情報をシカンダ氏が集約し、整理した情報を地域の普及指導員・農家に提供し、営農活動の手助けを行っているとのことでした。

また、OFA では、農家からの農場経営に関する相談にも対応していますが、近年、中南米から出稼ぎにやってくる季節労働者に関する問い合わせが増えているそうです。カナダでは季節労働者の待遇に関する規制が厳しく定められており、決められた労働時間や休日を守ることに、さらには週に1度買い物に連れて行くことなどが雇用者には義務付けられており、適正に守られているか、定期的に州政府の検査官が検査に訪れるそうです。このあたりは、外国人労働者の受入れに寛容なカナダならではの問題ですが、日本でもこれから労働人口が減少していく中、外国人労働者の受入れが増えてくれば、近い将来、起こり得る問題だと話を伺いながら思いました。



続いて、メイ氏より、オンタリオ土壌作物改良協会(OSCIA)の取り組みについて説明がありました。OSCIA は国と州政府管轄の非営利団体であり、持続可能な環境に配慮した農業を目指して、農場における土壌・水・空気の管理体制について生産者に指導を行っています。組織は5名の職員と10名の指導補助員で運営されており、オンタリオ州を5地区に分割し、各地区に職員1名、指導補助員2名の体制で生産者の指導に当たっているとのことでした。オンタリオ州だけでも日本の約3倍の面積があるにも関わらず、少ない人数でカバーできているのは、各地区の農業団体と連携を密にとっているからだそうです。

OSCIA が農家に指導を行うときには、2013年に作成したマニュアル書「農場環境管理計画(EFP)」を用いるそうです。EFP は農場環境23項目について、農家がチェックシート方式で自己評価を行う様式となっており、その結果を基にOSCIA が改善策について農家に指導を行っています。特に、水や土壌に関する項目が、生産性の向上には重要であり、EFPにはオンタリオ州に分布する土質ごとに、どれくらい

の水分状態が望ましいのかが細かく記載されています。また、収量を高めるために必要な土壌改良は、とにかく pH を上げること、有機物をたくさん投入することだと説明されていましたが、そうか病の問題を抱える十勝での応用は難しそうです。

なお、メイ氏のご家庭では本人が会社勤めで、夫と息子さんが農場を営んでいるとのことでしたが、このようなケースはカナダでは珍しいことではなく、農家の妻が外に働きに出ている割合は高いそうです。日本でも既婚女性の社会進出が声高に叫ばれていますが、いずれ十勝でも夫が農場経営、妻がオフィスワーカーといった家庭が当たり前の時代がやって来るのかもしれません。



(2) Sharpe Farm (オンタリオ州ゲルフ市)

大規模肥育牛農場

説明者：ビル シャープ 氏 (CEO)

執筆者：菊地 安好・川初 博司 (陸別町農協)



日本を出発して最初の現地視察先であります、オンタリオ州ゲルフ市近郊の畜産農家(大規模肥育農家)であるシャープファームを視察しました。

所有農地面積は 2,400ha で、最近も 80ha の土地を新たに購入しております(10a 当り 30 万円)。年間 2,000 頭の肉用牛を飼育しており、アンガス種が主でシャロレー種も飼養しています(アンガス種は肉値が高いため)。素牛はアルバータ州から買い付けて、2ヶ所の牛舎で常時 800 頭程度を飼育しており、18ヶ月を経過した牛からマーケットに出荷しています。なお牛舎内はかなりの密飼い状態のようでした。

飼料及び配合飼料は自給で、コーンサイレージに麦、またコーンサプリメントの混合飼料を使用しているそうです。バンカーサイロにはコーンサイレージを貯蔵し、シートの代わりに大量のリンゴ粕で覆うことで、溶出するリンゴ酸によってサイレージが腐らないようにしているとのこと。もちろん鎮圧はタイヤショベルで十分な時間をかけて行っています。



この地帯では、真冬においてはマイナス 20℃程度の気温であり、積雪量は年間 1m ほどで積もってもすぐに溶けてしまうとのことでした。冬でも牛舎の窓は半開きで、大型換気扇を使用して、換気には充分気をつけているようでした。

また肥育部門以外では、畑作においてはコーン、大豆、小麦、牧草等を生産し、さらに 35,000m³容量の乾燥・貯蔵施設を備えており、貯蔵された穀物は 1 年かけて売却しているそうです。なお、日本を含む海外にも輸出しているとのことでした。

その他、肥料等の生産資材の販売事業も行っており、肥料原料はコストを抑えるため、ロシア・ヨーロッパ・アジアの各方面から輸入しており、農場敷地内に大きな店舗を構えて営業しておりました。

シャープ農場では息子さん達 3 名も作業分担して経営に携わっており、奥さんも看護師をしながら当農場の会長の役職に就き、経理業務をこなしているそうです。その他、60 名の従業員がおり、人件費は一人当り年間 800 万円を支出しているとのことでした。

当農場は、シャープ氏の祖父達が 60 年前に入植したことをきっかけに始まっており、当初は 80ha の土地で養鶏業を営んでいたそうです。その後、何度か経営難の危機に陥ったものの、3 代目であるシャープ氏が引き継いでから、経営が安定化し、約 10 年前から大型経営に移行したそうです。

近隣農家との付き合いでは、一部収穫作業をボランティアで行うなど、周囲の人間関係にも配慮しており、シャープ氏が「仲間意識があればこそ経営が成り立つ」と熱く語っている姿が印象的でした。カナダの雄大な大地が物語っている様な気が致しました。



(3) Foundation Genetics (オンタリオ州ゲルフ市)

酪農サービス会社

説明者：デイヴィット ブランド 氏 (GM)

執筆者：太田 福司・高橋 伸逸 (大樹町農協)



7月9日午前、ゲルフ市から北西に約1時間のところにあるファウンダーション人工授精所に窺いました。この財団は、10年前に5名のオーナーによって開設され、現在はブリティッシュコロンビア州のゴードン・ワーカー氏、一時期世界を席卷したデュパスキュアファーム、そして家畜バイヤーで1,500頭搾乳しているジョン・ワーカー氏の3名のオーナーによって運営されています。財団では、現在100頭程

度の種雄牛を所有し、アンガス種数頭以外はすべてホルスタイン種です。また、ケベック州内の ABS 等、他の人工授精所にも 60 頭程の種牛を預けているそうです。

施設用地は 12ha で、事務所から離れたロンドン地区にも 20ha あり、従業員は採精師 5 名、事務職 8 名で運営されているそうです。また当施設は衛生管理を徹底しており、その管理工程については国からの認証を受けているとのこと。その一例として、牛舎ベットの敷料にはひざの負担が少なく、細菌の繁殖も抑えられるという理由から砂が用いられていました。さらに、飼料会社とタイアップして給餌するエサの共同研究も行っているそうです。ブランド氏によると、良い精液を採るために大事なことは、健康管理はもちろんのこと、第一の条件は、牛の体重管理(ダイエット)だそうです。



財団では、現在 30 ヶ国に精液を輸出していますが、6 ヶ月後に施設の増築を計画しており、将来的には 80 ヶ国との取引を目指しているそうです。仮に日本から精液のオーダーが入った場合には、約 3 週間後に CRI 社、アメリカの Semex 社を通して、日本に輸出するそうです。

当施設での採精は、ホルスタイン種が 10～11 ヶ月齢で始まり、午前中に 8,000～10,000 本/日のペースで週に 5 回行われます。肉牛については、15 ヶ月齢から始まります。この財団での種雄牛の価値は、1 頭当り 100 万円～3.5 億円くらいの開きがあります。中でも人気の種牛はマリオやピットブルで、ゲノミック・キング・サイアーでは、エアーリフト等があります。

こちらからの質問として、性判別精液はどのくらい作製し、また需要はどの程度あるのかを伺ったところ、現在は取り扱っておらず、これから着手する予定とのことでした。その理由として、国内では交雑種を扱っている牧場が約 90%と高い割合を占めており、高等登録を行っている牧場は 10%未満と少ないため、まだ需要がそれ程なかったからだそうです。しかし、海外では 25%、また国内でも将来的には 30～35%まで伸びる予想であり、当財団でもこれから取り組んで行きたいとの回答でした。



(4) Clvermead Farm (オンタリオ州ゲルフ市)

家族経営型酪農家

説明者：コーブ ホール 氏 (経営者)

執筆者：山下 善一・立川 博光 (大樹町農協)



3 日目午後からは、ゲルフ市近郊の酪農専業であるクルバーミード牧場を訪問し、牧場の 7 代目であるコーブ・ホール氏(41 歳)に説明を受けました。ホール氏の祖先は、1800 年代にイギリスからこの土地に入植しており、石造りの背丈ほどの基礎の上にあるキング式牛舎が、当時の名残として残っていました。

この牧場の特徴は、2007 年から導入した 3 台のデラバル社製搾乳ロボット、およびバイオガスプラントです。牧場の経営規模は、乳牛の飼養頭数が 350 頭、うち搾乳牛が 140 頭、平均乳量は 35kg/頭で、年間の出荷乳量は 1,500 トン。また、農地は約 200ha を所有し、小麦エン麦混播(ミックスドグレイン) 24ha、アルファルファ 48ha、コーン 80ha、グレインミックス 36ha をそれぞれ作付けしています。搾乳ロボットを導入した理由は、今までのパーラー形式のコストと両親の年齢を考慮し、

労働力を搾乳ロボットに求めていったからだそうです。 牧場従事者は、フルタイム 3 名(オーナー含む)と、パートタイマー 3 名(両親含む)で牧場を運営しているとのこと。



乳価は 1 リットル当り 77 セント(約 76 円)で、生乳販売が全収入の 8 割を占めており、残りの 2 割は淘汰固体販売で収入を上げているそうです。カナダではクォーター(生乳生産量割当)制度が導入されており、この牧場では 1 日当り 165kg の乳脂肪を生産する権利を持っています。この権利は 1kg 当り 250 万円で取引されており、この農場では約 4 億円相当の権利を保有しています。この権利がないと、生乳を買ってもらえないし、乳牛メーカーでも買い取れないシステムとなっており、もちろん直接買い取りも禁止されています。クォーター制度は乳製品だけでなく、鶏卵、鶏肉、七面鳥、種卵を含めた 5 品目で導入されています。

また生乳のクォーター制度には、最低出荷数量も決められていて、減産した年があった場合には、2 年以内にその減産量をカバーすればよいが、出来なければ、権利を手放さなければならず、その場合、売却金額は購入時の 70% になってしまうとのこと。また後継者が権利を継承する場合には、100% の権利を維持できる仕組みになっており、担い手対策として、このシステムが一役買っているそうです。

この農場では牛舎の隣にバイオガスプラントが併設されており、総事業費 2 億 5 千万円をかけて建設しています。発電能力は 240kw/h で、1 日に約 6 メガワット(自家使用量の 5 倍)の電力を発電しているため、余った電力は、20 年の売電契約を結んでいる電力会社に売却しているそうです。ホール氏によると投資額は 8 年間で回収できたとのこと。

発酵原料は、牛の糞尿の他に、年間 40 トンの鶏糞を使用し、発酵熱量を確保しており、原料槽は 25℃、発酵槽は 38℃ に保ちます。この工程の途中で 70℃ のパイプを通過させ、原料を無菌化させた後、固液分離を行い、固形分は販売、または自作地に還元しているそうです。また、発電機から発生する余熱水も場内で利用しています。

この牧場の飼養頭数とバイオガスプラントは北海道でも見られる規模でしたが、農場内はカナダらしい景観が大事にされており、また家族経営らしくコンパクトな施設配置となっており、350頭もの飼養頭数を感じさせない風景でした。

最後に TPP の話を伺いましたが、カナダにとって全体的にはプラスの効果をもたらされると思うが、ヨーロッパの安い乳製品がかなり入ってくると予想されるため、その点については不安視されている様子でした。



(5) University of Guelph, Muck Crops Research Station

(オンタリオ州ホランドマーシュ)

ゲルフ大学, 泥炭作物研究拠点

説明者：ケヴィン ヴェンダー クーイ 氏 (研究技術者)

執筆者：長崎 忍・植田 義隆 (幕別町農協)



ホランドマーシュ地区は土地全体が大きな窪地であり、過去には湖であった地域です。その後、水が引いたことで沼地となり、1900年代初期までは燃料用として泥炭が採取されてきました。農地として利用されるきっかけとなったのは、1925年に

ゲルフ大学のウィリアム教授が排水改良の研究に取り組んだことから始まっています。その後、土壌分析に基づいた土壌改良や排水暗渠やポンプ整備が進んだことにより耕地化が進み、2,500 エーカーの面積で野菜生産が始まりました。元々、有機質を多く含んだ泥炭地であったため、農地としても肥沃な土壌となり、現在では、人参・玉葱を中心とした 60 品目以上の野菜生産が行われています。農家の件数も 1930 年には 18 戸と少数でしたが、1970 年代後半にはピークの 350 戸にまで増加しました。その後、離農や合併により件数は現在 125 戸まで減少したものの、面積は 7,000 エーカーまで拡大しています。

ゲルフ大学の泥炭作物研究拠点では、泥炭地の排水改良、人参・玉葱の病害虫予察、出荷までの保管条件等について、職員 4 名と学生 5 名で研究に取り組んでいます。試験圃場として 6ha を所有しており、人参・玉葱を栽培し、品種試験や病害虫の発生状況についての調査を行っているそうです。試験圃場で確認された病害虫の発生情報は逐一農家に情報提供し、早期防除を呼びかけています。

ホランドマーシュで生産された人参や玉葱は収穫後、貯蔵庫で保管し、1 年間通して市況を見ながら出荷するため、品質を保つ貯蔵技術が重要視されています。具体的には、人参は室温 1℃、湿度 90%、玉葱は 25℃で風乾させて貯蔵し、鮮度を保つ工夫をしているそうです。



説明を受けた後、周辺の試験圃場を見学しましたが、見渡す限り泥炭特有の暗黒色が広がっており、これだけの暗色を呈する泥炭土は十勝でも見たことがないような特殊な土壌でした。十勝では一般的に泥炭土は排水性が悪く、pH 改良にも多量の資材を必要とするため、厄介な土壌である印象が強いですが、ホランドマーシュではこの欠点を長年の排水改良や土壌改良により改善し、さらには肥沃な土壌に生まれ変わらせました。十勝でも過去には長い年月をかけて痩せた大地(火山性土)を改良してきたように、ホランドマーシュでも同様に苦労して土地改良を重ねてきたのだと知り、国は違えども農業の根幹は土づくりであると改めて認識しました。

最後に TPP 交渉について、ホランドマーシュの生産者がどのように考えているのか、クワイ氏に質問しました。クワイ氏によると、意外にもホランドマーシュの野

菜生産者は、TPP 交渉の先行きについてさほど気にはしていない、ということでした。というのも、最大の貿易相手国であるアメリカとカナダは、お互いにそれぞれが必要な時期に人参・玉葱を輸出入し合う関係にあり、両国の生産者協会同士ですでに別の協定を結んでいるため、TPP 交渉の結果がどうであろうと取引に影響はないと考えているようです。それよりも最近では、ロシアからアメリカへの野菜の輸出量が増加傾向にあり、対照的にカナダからアメリカへの輸出量が減少しているため、TPP 交渉相手国よりもロシアの動向を気にしているとの回答でした。



(6) Holland Marsh Grower's Assn. (オンタリオ州ホランドマーシュ)

ホランドマーシュ野菜生産者協会

説明者：ブリジッド ベイサ 氏 (協会職員)

執筆者：山田 幸司・藤村 敏則 (帯広大正農協)



ホランドマーシュ(オランダ湿地の意)はオンタリオ州の州都、トロント北方 50km に位置する低湿地農業地帯です。シムコー湖南岸クックス湾に面し、昔は湖の底で有機物が堆積した腐植に富む肥沃な土壌です。しかし、元々は湖の底であり、地盤

が低く排水が困難な地域です。更に年々地盤沈下(圧密沈下)が進行中で、幹線排水路(カナル)より地面が年とともに低くなっています。このため暗渠排水は一度、集水井戸に集めポンプアップして、上方の幹線排水路に排出しています。

このホランドマーシュ地区で営農する野菜生産者 125 名が会員となり、会員から選出された理事 9 名と職員 2 名で運営しているのがホランドマーシュ野菜生産者協会です。主な業務は国や州政府との交渉、販売戦略の提案、会員の相談対応などです。とりわけ、6～8 月の繁忙期における労働力確保のためメキシコ、ジャマイカなど中南米諸国からの季節労働者が多く、その雇用条件についての相談が多いとのこと。

この地区は「カナダのサラダボウル」と呼ばれ、人参、玉葱を中心にレタス、トマト、セロリなどの野菜をはじめ、60 品目以上の各種作物が生産されているそうです。1 戸当りの平均規模は約 20ha 程で、カナダとしては大規模ではありませんが、有機栽培など付加価値の向上を図るとともに、人参や玉葱などの収穫物は貯蔵庫に保管し、端境期に出荷するなど有利販売に努めています。



次に、キャロン農場(Carron Farms Ltd.)を訪問しました。この農場は人参(キャロット)と玉葱(オニオン)を合成しキャロンファームと称しています。その名の通り人参と玉葱を主生産物とする農場です。特に、人参は紫、黄、オレンジなど色違いの品種を栽培し、特徴ある農業生産をしています。

1934 年、祖父がオランダからホランドマーシュ西地区に土地を購入し、入植しました。地域で最初に暗渠排水を入れるなど排水システムを整備し、野菜生産を始めました。その後も周辺の土地を購入し、規模を拡大していきました。入植以来一番大変だったのは、1954 年ハリケーンが襲来して大雨となり、この地域は 6 フィート(約 1.8m)の水に覆われたことだそうです。これにより 1 年間営農がストップ、復旧の原動力は排水システムの効果であるとのことでした。

オランダ人は「世界は神が造りたもうたが、オランダはオランダ人が造った」と自負しているように、オランダの国土は 20%が人為的に造成された干拓地(ポルダー)により構成されているそうです。有名な風車を利用した排水システムに見られるよ

うにオランダ人が長年にわたり蓄積してきた水を制御する技術が、この低湿地帯を豊かな農業地帯にする原動力となったのだらうと思いました。

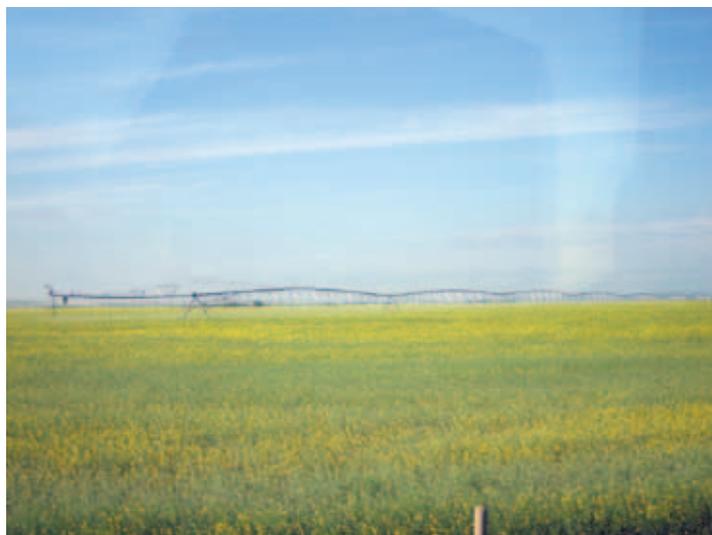


(7) **Stanford Farm** (アルバーター州レスブリッジ市)

小麦生産農場

説明者：ゲイリー スタンフォード 氏 (経営者)

執筆者：薩田 裕秀・中嶋 康裕 (音更町農協)



7月13日、日差しの強い朝日を浴びながら、レスブリッジのホテルに1台のジープが到着する。午前中の視察先として訪れる、スタンフォード農場のオーナーであるゲイリー氏が美人の奥さんの運転でやってきました。

さっそく、自らがバスに乗り込み、私たちを道案内して下さいました。道中の景観は防風林もなく、一面、小麦畑とキャノーラ畑が広がり、スタンフォード農場に到着するまでの40分間は、この緑と黄色の果てしない圧倒的なキャンパスが私たちを魅了する。さすが、アルバーター州は世界有数の穀倉地帯だと感心してしまう。

スタンフォード農場は現在 2,500ha(うち借地 1,500ha)の農地に春小麦、冬小麦(日本では秋播き小麦)、キャノーラ(菜種)、大麻を作付けしています。オーナーは現在 60 歳。農場を経営する傍ら、カナダ穀物生産者協会の会長を務め、忙しい日々を送っているそうです。農場は本人と奥さん、息子さん 2 人(35 歳と 32 歳)の計 4 名で経営しているとのことでした。

作物の中では春小麦がメインで 4 月下旬から整地、5 月 1~10 日の間に播種作業を行います。1 日で 400 エーカー(160ha)を播種するそうです。除草剤は播種前にラウンドアップを散布し、播種後に別の除草剤を 1 回、その他殺菌剤を 1 回のみとのことで、殺虫剤はアブラムシが発生しないため、使用しないとのこと。散布水量は 1 エーカー当たり 20 リットル(反当りに換算すると 5 リットル)を散布するそうです。



農場で特に目に付いたのが 7 つの貯蔵タンクで、回転式の排出オーガが付いており、容量は 147 トン、水分率 14.6%まで落とした小麦を貯蔵しているとのこと。また、水分率を 14.6%までどのように落とすのか質問したところ、コンバインで刈り取った小麦を庭に 1 日放置すれば 14.6%まで下がるそうで、日本のように経費として、賃料や乾燥調整費は発生しないそうです。

灌漑に使用する水の経費は 1 年当たり 20 円/エーカー、また肥料は基肥と追肥 1 回を含めて、65kg/エーカー必要とのこと。収穫する小麦の割合は春小麦 8 割、冬小麦 2 割となっており、小麦は秋から冬の間バンクーバー港まで 14 トンダンプで息子さんが搬送しています。なお、春小麦の平均収量は 6.25 トン/ha、平均収入では 225 千円/ha あるそうです。また農場の総収入は 1 億円程度あり、その内約 25%が利益となるそうです。日本との大きな違いは国からの交付金がないこと、また州政府による積み立て方式の農業保険があることで、不作で収穫できない場合は、平年作の 3 分の 1 の保障があるそうです。

また TPP に関して意見を伺いました。カナダで生産される小麦は莫大な量であるため、カナダの小さな国内需要ではとても吸収しきれず、基本的に国外市場に活路を見出しています。そのため、同州は輸出に対する関心が非常に高く、大規模農場

では、TPP による農産物の貿易自由化に対しては、大いに賛成しているとのことです。

最後にこのアルバータの広大な土地、長い日照時間、豊富な水資源を見せつけられ、農業者の努力によってはまだまだ伸びしろがある、やりごたえのある素晴らしい大地だと思いました。



(8) Potato Growers of Alberta (アルバータ州レスブリッジ市)

アルバータポテト生産者組合

説明者：ジェイ アンダーソン 氏 (プロジェクトマネージャー)

執筆者：青山 哲男・岸塚 隆司 (帯広大正農協)



アルバータポテト生産者組合の視察研修では、スタッフ及び馬鈴しょ生産者とポテト料理の昼食を取りながら研修を受けました。

同組合はアルバータ州の馬鈴しょ生産性の向上を目的として設立された、非営利の馬鈴しょ生産者団体です。1966年に創立されてから、今年で節目の50周年を迎

えます。現在は 135 戸の馬鈴しょ生産農家が組合員として加盟しており、生産高に応じて組合に会費を納めています。

同組合は本部に職員 5 名、支部に種子専門員 1 名の計 6 名で運営しており、主な業務は生産者指導、販売促進、研究開発の 3 点について取り組んでいます。生産者指導では、新品種や新資材、最先端の技術について、生産者に情報提供したり、専門家を招いて、疫病等の馬鈴しょの病害に関する講習会を年に 3 回程度開催しています。販売促進では、食の安全・安心に関する栽培指針を生産者に指導し、消費者や食品メーカーにこの取り組みを PR して、産地のブランド力を高めるため活動しています。研究開発では、馬鈴しょの新品種や栽培技術の開発を行っており、研究費には州政府や加工業者から得られた資金を充てているそうです。またこの他にも、生産者を代表して、フリトレーやペプシコといった加工業者との価格交渉、および国や州政府との政策交渉を行っています。



アルバータ州は灌漑設備による安定した水分供給と長い日照時間、また昼夜の寒暖差により、馬鈴しょ栽培に適した地域であり、生産された馬鈴しょは品質が高くユーザーからの人気も高いそうです。現在、組合員全体の馬鈴しょの作付面積は 21,201ha で、用途別の内訳では加工用 16,252ha、種子用 3,859ha、生食用 1,090ha を作付けしており、圧倒的に加工用の面積が多い状況です。加工用馬鈴しょは組合と提携している加工業者に出荷され、フライドポテトやポテトチップスの原料となっています。なお、アジア圏内のマクドナルドで使用されているフライドポテトの約半分がアルバータ産であるとの話を伺い、妙な親近感を覚えました。

研修後は、組合が主催するバーベキューパーティーにも招いていただきました。言葉の壁はありましたが、部外者である我々を快く歓迎してくださり、多くの移民を受け入れてきた多民族国家の寛容さを垣間見ることができました。



(9) Wind Farm (アルバーター州レスブリッジ市)

馬鈴しょ生産農場

説明者：マイク ウィンド 氏 (経営者)

執筆者：山本 裕慈・西田 高尚 (帯広大正農協)



現地時間で7月13日午後、カナダ西部ロッキー山脈の東側、カルガリーから南へ200kmほどのレスブリッジ市郊外に位置する、大規模生産農場マイク・ウィンド氏の農場を視察しました。農場はウィンド氏と2人の息子さんとで経営しており、作物は馬鈴しょ450ha、穀類800ha、キャノーラ(菜種)150ha、牧草70ha、その他含めて合計1,600haを作付けしています。中でも馬鈴しょはすべてが加工用で、フリトレーという加工業者に全量出荷しており、栽培する品種もすべてフリトレーの自社ブランドである8品種を作付けしています。

播種作業は精度向上のため、GPS自動操舵機能付きのトラクターを使い、畦幅90センチで播種作業を行っています。また防除作業は6~7回ほど行っており、そのうち1回はセスナ機を飛ばして農薬を散布しています。さらに収穫時には6畦掘りの

ハーベスター(1台約7,000万円)2台を使い、1日約11haのペースで収穫を行っているそうです。あまりのスケールの大きさに言葉もありませんでした。



収穫後の馬鈴しょは粗選別の後、農場内の定温庫にバラ積み貯蔵されていました。農場内には空調設備を備えた定温庫が2台設置されていますが、さらに総工費1億円をかけて3,000トン規模の貯蔵庫を建設中とのことでした。貯蔵された馬鈴しょは、フリトレーに9月から翌年7月にかけて計画出荷しており、フリトレーの出荷指示に合わせて、7名程度の人員で洗浄・選別後、1日あたりトラック7~10台分を出荷するそうです。

なお、馬鈴しょの収量は反当り50俵ほどになり、総収量は23万俵ほどになるとのこと。大規模農業といっても、決してスケールメリットだけを追求した粗放農業ではなく、管理された栽培体系の中で一定の収量を得ているのだと知りました。また、製品の基準は直径5~10センチの範囲で、製品率は約94%、選別屑は動物の飼料として利用するそうです。また製品の単価は、貯蔵期間によって異なるようです。



施設を見学後、圃場も見学させていただきましたが、圃場にたどり着くまでの距離、途切れることのない圃場、半径 500m ほどのスプリンクラー、いずれをとっても桁外れの農業規模に驚かされました。

今回の視察では、広大な作付面積であるにも関わらず、反収と製品率の高さに驚くと共に、高度の作業機械と栽培技術に裏付けられた農業への情熱を感じることができました。また、世界には色々な形態の農業があるということを改めて認識し、十勝農業も TPP や異常気象、消費者ニーズの変化など、多くの課題に対応できる柔軟な頭と行動力を強く持つべきだと感じました。

(10) Grandville Island Public Market (ブリティッシュコロンビア州バンクーバー市)

グランヴィルアイランド公設市場

説明者：石井 幸夫 氏 (ツアーガイド)・クリスティー氏 (店員)

執筆者：松久 充 (十勝池田町農協)・石川 幸雄 (十勝高島農協)



研修の最終日、グランヴィルアイランド公設市場を視察してきました。

バンクーバー空港からバスで走ること 30 分、グランヴィルアイランドが見えてきました。グランヴィルアイランドはフォールス川に突き出した小さな半島で、1950 年代、カナダ造船業の多数の町工場を中心に栄えた工場街です。その後、工場街は衰退しましたが、1970 年代の再開発でその跡地を再利用して買物、食事などが楽しめるマーケット街として生まれ変わりました。

6 月の半ばから 10 月にかけては、ファーマーズマーケットも開催されており、家族経営の小規模農家で生産された新鮮な野菜や果物が店頭に並んでいます。また、美術工芸品やハンドメイド製品など、ありとあらゆるものが揃っているため、地元民はもとより、現在は観光客で連日賑うスポットとして、その雰囲気は明るく、とても楽しい。

マーケットの一角にある公設市場では、カナダでとれた食品はもとより、カナダ以外の世界各国の食材をも販売しています。一般のスーパーマーケットでは取り扱

わなのような珍しいものが多数陳列されているため、店内は人と人がぶつかるほどの盛況ぶりを見せていました。



市場内のオーガニック専門店の一つで、移動店舗として有機野菜の販売をしていたクリスティー氏にお話を伺うことができました。この店では、家族で経営する小さな農場と契約し、旬な有機野菜を色・形などを気にしながら購入しているそうです。店頭には並ぶ野菜の種類は豊富で40種類くらいありましたが、各数量は少なめでした。そのため、商品が残り少なくなったら契約農家に連絡を取り、直ぐに補充してもらっているそうです。とりあえず、商品を切らさないよう通年で生産物は入荷していますが、夏場は毎日のように各地の農家より商品が入って来る一方で、冬場はリンゴしか販売しない、といったこともあるそうです。

最近のカナダ人はオーガニック嗜好者、さらに上をいくビーガン(完全菜食主義者)も増えてきているため、有機野菜は通常の野菜よりも値段は張りますが、売れ行きはよいそうです。ただし、飛ぶように売れるわけではないので、生産者の方たちは余り儲かっていない、とクリスティー氏は仰っていました。



V 団員所感

陸別町農協 前理事 菊地 安好 (団長)

今回の視察では、カナダ東部地区の農業連合、土壌・作物協会、生産者、西部地区の生産者組合、生産者の話を聞くことができた。各地区の農民組織では、国や州との交渉や農業政策の情報提供、生産者への広報活動、また地質の研究や調査をして、作物に合わせた生産指導を行っている。

今回の研修を通して、カナダの農業情勢について、色々と話を聞くことができた。オンタリオ州でも、農家の高齢化、後継者不足が問題となっている(同州の農業者の平均年齢は 55 歳)。ホランドマーシュの野菜生産者協会には、人手不足であることから、メキシコ人などの雇用条件について相談が寄せられているとのことであったが、日本も同様に労働者への厳しい決まりがある(賃金、休暇、買い物に連れて行くなど)。生産者は収穫した馬鈴しょ、人参、トマトなど、日本では規格外になるような小さい野菜まで直売所で販売しており、食物を大切にしている姿勢が窺えた。



コーディネーターのリチャード氏とともに

アルバータ州では広大な土地、平らな農地に圧倒された。カナダには約 300 万の湖があって、豊富な水資源に恵まれている。諸外国では雨不足で土地が砂漠化し、深刻な問題になっているが、カナダではこの水資源を背景に、今後も世界で有数の農業地帯であり続けるだろう。レスブリッジで視察訪問した、カナダ穀物生産者協会会長を務めているスタンフォード氏の農場は、家族経営で約 2,500ha の広大な農地で、小麦、大麦、キャノーラなどを生産している。その後、訪問したウィンド農場でも、1,600ha の農地に加工用馬鈴しょ、キャノーラ、大豆、牧草などを栽培している。両農場とも農業大国カナダを象徴するような大規模農場であった。

オンタリオ州は酪農地帯である一方、アルバータ州は穀倉地帯であるため、TPP に対する考え方にも相違が見られた。カナダでは、酪農・養鶏・養卵の生産や出荷を政府が管理しており、対象となる乳製品などの品目を守りたい考えであるが、一方では穀類やルーサン牧草などの輸出も盛んに行われているため、輸出の拡大にも関心が高い。

近年の世界的な異常気象により、農産物の生産量維持が難しくなり、2050年には世界の総人口が97億人に達すると予測される状況で、将来的な食糧確保がこれからの大きな課題である。今回の視察を通して、カナダの生産者も十勝の生産者と同じく、農業に向ける意気込みは大変強いものが感じられた。今後の世界的な食糧問題の解決に向けて、互いが農業にかける意識・技術ともに切磋琢磨しながら、取り組む必要があると改めて感じた。

最後になりますが、今回の研修にあたり、各農協および関係機関、参加者の皆様には大変お世話になりました。心より感謝とお礼を申し上げます。



ガイド兼通訳のテリー鈴木氏（芽室町出身）

十勝高島農協 管理部 管理係長 石川 幸雄（副団長）

この度、第38回の十勝農協連海外研修視察に参加し、十勝管内農協の役職員19名とともに、カナダ農業を11日間にわたり研修させていただきました。日本の約26倍もの広さを持つ、大国カナダの農業を直接視察できたことは、私自身にとって貴重な財産となりました。

研修したカナダ農業は、個々の農業施設の充実・大型の農作業機械等、酪農・畜産農家や穀物農家の規模の大きさには、ただただ驚かされるばかりでした。そして、どの視察先でも、たくさんの質問に快くお答えしていただき、懐の深さに感銘致しました。しかし、経営者のお話を聞きながら、抱えている問題(高齢化や後継者不足・季節労働者の確保など)については、経営規模の大小に関係なく、日本の農業と同じだなと思いました。

天候にも恵まれ、初めてのカナダに圧倒されながら無事研修が終えられましたのも、菊地団長をはじめ、農協連事務局の岡崎さん、農協観光の笠松さん、ともに研修をされました役職員のメンバーのおかげです。大変お世話になりました。

最後に、このような機会を与えていただいたことに感謝し、今後、この貴重な体験やたくさんの人とのつながりを大事にしていきたいと思えます。



トロント空港のバスターミナルにて

帯大正農協 常務理事 青山 哲男

この度、第 38 回十勝農協連海外農業研修視察において、11 日間の日程でカナダの農業研修視察をさせていただきました。カナダの国土は日本の約 26 倍あり、寒冷的な地域が多く、農作物の栽培は南部の地域に集中しているそうです。視察中はオンタリオ州、アルバータ州、ブリティッシュコロンビア州と長い距離を飛行機で移動し、国土の広さを感じました。視察先の中でも、アルバータ州は、灌漑設備による安定した水分供給と長い日照時間、また昼夜の寒暖の差により、穀物の栽培に適した地域であり、小麦、キャノーラを栽培する大規模経営の農家を見ることができました。穀物に関しては国内消費市場が限定されているため、海外市場に輸出する戦略をとっており、最近では植物油のキャノーラで、日本やアメリカ、中国といった海外市場に販路を拡大しているとのことでした。

いま TPP 交渉が行われている中、日本の農家は交渉に参加反対の取り組みを行っていますが、カナダの農業者は農産物の輸出国であることから、TPP については賛成の意見を述べていました。ただし、アメリカとカナダの二国間交渉については、難航しているとのこと。カナダの農業は大規模経営の中で穀物を栽培し、アジア諸国へ輸出を拡大して伸びてきていることを実感しました。

今回の研修視察にあたり、菊地団長をはじめ団員の皆様、十勝農協連、農協観光には大変お世話になり、また貴重な体験をさせていただいたことに大変感謝致します。



若者に人気のカナディアンビール

帯廣大正農協 理事 岸塚 隆司

この度、十勝農協連海外研修視察において、7月7日から7月17日までの11日間、カナダの研修視察に参加させていただきました。私自身は大変忙しい時期のため不安でしたが、カナダに着いてからは参加メンバーとの交流も深まり、大変楽しい研修を過ごさせていただきました。

カナダでは広大な土地を活かして大規模農業が展開されておりました。主な品目は小麦・大豆・デントコーン、そして酪農業などで、視察先の経営面積は平均2,000ha以上というスケールでした。

東部のオンタリオ州は冷涼地で、地域指導員が土壌改良や暗渠整備などに力を入れているようでした。西部のアルバータ州は乾燥地で、500mものスプリンクラーで灌水作業をしていました。どの国の農業も自然と戦う職業なのだと実感させられました。

アルバータ州では1966年にポテト生産者組合を創立し、組合員135戸21,000ha以上の作付面積で加工用馬鈴しょを生産しており、主にフライドポテトなどの原料として出荷しているそうです。さらに作業機は日本でも見たこともないような大型機械ばかりで、GPS(自動操舵機能)付きのトラクター等を使用しており、ただただ圧倒されるばかりでした。

日本の農業では、まるで太刀打ちできそうにない経営規模と土地の広さを目の当たりにし、貴重な体験をさせていただきました。

最後になりますが、今回の研修に送り出させていただきました帯廣大正農協、また、研修中お世話になりました菊地団長を始め、十勝農協連関係者各位の皆様に、心より感謝とお礼を申し上げまして、研修視察の感想とさせていただきます。

帯廣大正農協 理事 山本 裕慈

自分の親でさえ経験したことのない雨不足の中、期待と不安の両方を抱えながら、カナダへの農業研修視察に参加させていただきました。

カナダの農業には粗放的なイメージを抱いておりましたが、管理の行き届いた畑を見学し、収量等の話を伺い、そのイメージは一変しました。圧倒的な機械力はもちろんですが、様々な気象や土壌条件を克服する努力と技術、何より生産者同士の結びつきの強さを感じました。

畑作農家では、広大な農地を、巨大な機械が最新技術で作業を行い、一方で野菜農家では多くの人手をかけて、安全な作物を栽培していました。共に地域の人々と組織を作り、情報交換や地位向上に向けた活動を展開していました。規模や形態の違いはありますが、農業者としての情熱と誇りを感じました。

今回、研修に参加された皆様と親交を深める時間も充分ありました。これからの自分にとって大変有意義な研修でした。

最後に、菊地団長をはじめ視察団の皆様、お手伝いを頂いた岡崎主幹、笠松事業課長へお礼を申し上げ研修の感想とさせていただきます。



自給自足で生活するメノナイト

帯廣大正農協 理事 西田 高尚

この度、十勝農協連海外視察研修ということで、11日間にわたり、カナダの農業現場を視察させていただき、大変貴重な経験となりました。

日本の農業と比較すると、水・土地の確保やカナダ国内における農業・農業者の立場、農協に代わる各生産者組織の成り立ちや活動、共済制度に代わる生産物の保険の仕組み、州・国との補助関係など、色々な点において違いが見られました。この違いは、それぞれの国の風土や国民性から成り立っているものであり、どちらが良い、といった明確な答えは出せません。

今回の視察先農場等では TPP には概ね賛成という意見が多く、それ以外にも十勝の農業関係者とは考え方や発想が異なっており、その分興味深い話を沢山聞かせていただき、自分の視野も少し広がったように感じています。

最後になりましたが、今回の研修では農協・農協連はもとより、菊地団長、石川副団長、農協観光の笠松様、事務局の岡崎様、また視察団の役職員の皆様には大変お世話になり、感謝申し上げます。



メノナイトが農産物を出店するセントジェイコブズマーケット

帯広大正農協 理事 山田 幸司

この度、7月7日から第38回十勝農協連海外研修視察に参加し、管内農協の役員並びに職員の方々と懇親を深め、大変貴重な経験をさせていただきました。

さて、今回のカナダ研修視察は、十勝地方が記録的な大干ばつの中スタートしました。

カナダでは、広大な大地だけでなく、GPSで整備された何処までも続く畦、豊富な水資源を利用した全長500mのスプリンクラー等、作物に対する管理・技術力の高さに驚かされました。その反面、作物の貯蔵施設などは、日本の技術に比べ、かなり遅れているように見受けられました。

TPP交渉が水面下で大詰めを迎える中、これからの日本の農業にとって、交渉の結果次第では大きな影響を受けることが予想され、TPP参加国であるカナダの農業者及び関係者の話を伺い、現地を視察できたことは非常に貴重な体験となりました。

最後に今回の農業視察にあたり、視察先の関係者の皆様、菊地団長はじめ視察団の皆様、添乗員の笠松様、事務局の岡崎様には大変お世話になりました。また、このような機会を与えてくださいました関係各位に感謝とお礼を申し上げます。

帯廣大正農協 常勤監事 藤村 敏則

今回の研修ではオンタリオ州ゲルフ市(トロント近郊)、アルバータ州レスブリッジ市(カルガリー近郊)、そしてブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー市を訪れました。カナダの東部から西部にほぼ横断したことになります。それぞれの地域で特徴ある農業が展開されていました。

トロントからカルガリーへ、カナダの穀倉地帯の上空を 2 時間程飛行しました。飛行機の窓からは広大な大地と数多くの湖、その湖は氷河の流れたのと同じ方向に細長い形で畑の中に横たわり、その水が灌漑用水として利用されています。氷河の偉大な力が作り出した大地ということが、明瞭に理解できる光景でした。眼下に広がる畑は 1 マイル(1.6 km)平方、約 260ha を 1 区画とし、それを 4 分割し、約 65ha に区切られた耕地が、整然と地平線の彼方まで続く壮大な景観は「ため息の出るような広さ」と表現すればよいのでしょうか。

視察した農場はオンタリオ州で 3 ヶ所、アルバータ州で 2 ヶ所でした。そのうち、オンタリオ州のクルバーミード牧場は搾乳牛 140 頭、飼料畑 200ha。また同州のホランドマーシュ地区の野菜農家は平均 20ha と云う説明には、“ソコソコの大きさ”に、何か「ホッ」とするような感がしました。

一方、小麦、キャノーラ(菜種)、トウモロコシ、大豆など穀類生産を主体とする農場は 1,000 とか 2,000ha 以上の経営面積ですが、大規模化しなければ生き残れない環境にあるのです。大型機械を駆使した「力づく農業」のカナダ。十勝の農業は隅々まで丁寧に耕し、作物を慈しみながら育てる「匠の農業」と云えましょう。

研修視察を通じて多くの事を見聞き出来、大変有意義でした。この成果を、今後の農協での職務に役立てたいと思います。

結びに、このような機会を与えていただきました帯廣大正農協、そして企画立案をしていただきました十勝農協連、菊地団長、石川副団長はじめ団員、事務局、添乗員、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。



ファーマーズマーケットに並ぶカラフルなポテト

大樹町農協 理事 太田 福司

約 30 年ぶりにカナダを訪れることが出来ました。当時、私はテデスコという牧場で 2 年半、ニッポニアとスタージーンという牧場で 1 ヶ月ずつ酪農の仕事に従事していました。また通訳のテリー鈴木さんにもまた会えたのが、とても懐かしく、強烈な印象として残りました。

今回の研修を終え、今振り返ってみますと、時差ボケの中で過ごした最初の 2～3 日が体力的にもつらい中で、各自あまりまとまっていなかったものが、レスブリッジの日本食レストランで一気に距離が近くなり、打ち解けたところを見ると、日本食って素晴らしいなと思いますし、世界に出て行っても受け入れられるのは当然だなと思いました。ありがとうございました。



ナイアガラの滝にて

大樹町農協 理事 山下 善一

この度、第 38 回十勝農協連海外研修視察において、7 月 7 日～17 日の期間でカナダを視察させていただきました。管内農協役職員の方々との懇親も深め、菊地団長をトップに個性溢れるメンバーに恵まれ、有意義な時間を過ごせたことに感謝致します。

12 時間にも及ぶロングフライトで、オンタリオ州のトロントに到着。振り返れば 36 年前、酪農実習で過ごした地域。ハイウェイを飛ばして研修地まで到着するまでの 2 時間、ところどころにある思い出の面影を記憶から呼び戻しながら、車窓から臨む風景。都市化の波に飲まれていったのであろうかつての地を、少しばかり拝見することができました。ハイウェイから臨むかつての酪農の地は、牛舎の息は感じず、姿はそのままでも、ほとんどが小麦畑や大豆などの穀倉地帯に変わっていました。現在では、カナダの人口の 3 分の 1、経済も 3 分の 1 がオンタリオ州に集中しているとか。

この度訪問した研修先、酪農、畑作、野菜、小麦、馬鈴しょ生産農家は、ほとんどが家族経営主体でした。両親が高齢のため、ロボット導入により労働力を削減したり、巨大化した農場経営者(両親と3人の息子)は地域との融和のため、頼まれれば、先に依頼作業を処理したりとか、このような考え方は、私たちと変わらない行動だなあと感じました。

アルバータ州のカルガリー南部、アメリカ国境に程近いレスブリッジ近郊のポテト生産者(両親と息子夫婦)は、マイル四方(256ha)に区画された農地、それをさらに4分の1(64ha)に整備して、キャノーラ(菜種)・フラックス(麻)・ヘンプ(大麻)・大麦・小麦・輸出用チモシーなどなどを作付けしているとのこと。確かに規模はどでかいのだけど、家族で経営していること(機械好きな若奥様もいたり!)に感心するとともに、親近感を覚えました。

TPPについて意見を聞くと、乳製品などはヨーロッパ製品が脅威であるとか、穀物などではカナダは輸出国で、日本や韓国とはうまくいっているが、アメリカに手こずっているとか、日本同様に難航している様子が窺えました。一方で、品目によっては協定が結ばれており、良好な貿易関係を構築していたり、大規模農場などではTPPはカナダにとってプラスをもたらすという、肯定的な意見も聞かれました。

最後に今回の農業視察にあたり、視察先の関係者の皆様、事務局の岡崎様、添乗員の笠松様には大変お世話になりました。このような貴重な機会を与えていただきました関係各位に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



ワイナリーにてアイスワインの試飲 (ナイアガラフォールズ)

大樹町農協 企画管理課 課長待遇 高橋 伸逸

第38回十勝農協連海外研修視察、カナダ11日間に参加させていただきました。カナダは気候が北海道とほぼ同じで、初夏の季節であり、視察には最適な環境でした。また、農作物も十勝と同様にコーン、大豆、小麦、馬鈴しょ等を中心に栽培しており、総じて順調な生育となっております。

そんな中、個人的には何より収穫機の大きさに驚かされました。このクラスの灌水機、トレーラー等、初めて見るものばかりで大変勉強になりました。ただ、この時期に畑での農作業を行っている人(トラクター等)が見当たらなかったことは、大変不思議な光景でしたし、改めて日本の農業との違いとして実感して参りました。この度の研修で、いまさらですが、大自然と恵まれた環境の中で、徹底した肥培管理を行っている、十勝農業のすばらしさを再確認致しました。

今回の視察に当り、関係機関や視察先関係者の皆様、団長を始め、視察団の皆様、さらには事務局・添乗員の方々には、大変お世話になりました。このような貴重な機会を与えていただきました十勝農協連を始めとする関係各位様にも、深く感謝を申し上げます。大変ありがとうございました。

以上、誠に簡単ですが、この度の視察の感想とさせていただきます。



ナイアガラの水力発電所

大樹町農協 業務部 燃料課 主査 立川 博光

この度、11日間の日程で、十勝農協連海外農業研修視察に参加させていただきました。研修を通していろいろな情報交換ができ、大変刺激を受けました。また日本から長時間の飛行で、今回初めての訪問先でもありますカナダに降り立ち、不安と緊張もありましたが、団長を始めとする研修メンバーにも恵まれ、研修視察が進むにつれて交流も深まり、大変貴重な体験をさせていただきました。

カナダの広大な大地が広がり、どこまでも果てしなく続く景色はとても素晴らしく、日本の農業と比べても桁外れの大型農業機械のスケールに驚かされました。また、カナダの農耕地は日本の3倍を有し、農家のほとんどが家族経営であると伺いました。その中で小麦やコーン、大豆などの作物を作付けしており、人手が少ない中でも大型機械を導入し、収穫まで手掛けているところに、十勝農業との違いを感じさせられました。

一方で、農業の原点でもある土壌改良にも取り組んでおり、先進の技術により、より豊かな生活が営まれ、気候も温暖であり、循環農業を目指すことにより、生産性を高めるよう努めていました。実際に生産者から色々な情報を聞いたことにより、今後の十勝農業においても参考になる、魅力ある農業の姿だと感じさせられました。

最後になりますが、関係機関の皆様をはじめ十勝農協連の事務局、そして視察先の関係者の方々に大変お世話になり、ありがとうございました。このような貴重な機会を与えていただいたことに深く感謝申し上げます。



小麦を港まで搬送する 10 t ダンプ

音更町農協 理事 薩田 裕秀

カナダの海外研修視察に向け、東京よりエアーカナダ 006 便に乗った 21 名を、トロント、ピアソン国際空港で心地よい雨で迎えてくれる。7 日の出発から不安と緊張に包まれた私たちの気持ちを落ち着かせ、視察に臨むスイッチが入る。

オンタリオ州ゲルフにおける視察では、まずホテルでカナダ農業情勢についてのレクチャーを受けました。まず驚いたのは日照時間の長さでした。日が落ちるのは午後 9 時半過ぎ、まずこの日照時間の長さこそが、世界有数の農業地帯を築く礎になっているのだと知りました。オンタリオ州は酪農業が盛んで、農産物価格の安定化を目的に、個別農家ごとの生産割当量の配分がきちんと管理されるシステムになっています。しかし、TPP によって制度撤廃されると、海外から安い乳製品に国内市場が奪われる可能性があり、カナダの酪農関係者は強い危機感を抱いているそうです。そんな話を聞いた後、大規模肥育農場のシャープ農場を視察しましたが、TPP はどこ吹く風で、その規模の大きさ、スケールには圧倒されました。

12 日にはアルバータ州レスブリッジに入り、小麦、馬鈴しょ農家を視察しました。防除体系の中ではアブラムシがいらないため殺虫剤をスルーし、殺菌剤も 1~2 回の散布で収穫するとのことで、日本では真似のできない農法でした。アルバータ州は世界有数の穀倉地帯で穀類やキャノーラの輸出に力を入れ、TPP によるアジア圏を含

めた市場開放に大きな期待を寄せているそうです。バスでの移動中に見えてくるキャノーラ畑には500mのスプリンクラー、畑1枚が640エーカー(256ha)、まさにこれがカナダだと感じました。

それぞれの州において、実際に生産者の方から話を聞き、質問できたことは非常に貴重な体験となりました。また管内農協役職員の方々と研修を通じて交流、情報交換することができ、関係各位には心より感謝とお礼を申し上げます。ありがとうございました。



2晩連続で通った和食レストラン「王将」

音更町農協 理事 中嶋 康裕

晴天の帯広空港を飛び立った我々視察団は、一路カナダへと向いました。東部地域の畜産・野菜、西部地域の畑作関連を中心に、限られた時間の中でカナダの農業情勢が感じ取れるよう準備された視察先、「自由行動」の文字が一切ない行程のスタートです。広大な森と数えきれない湖を眼下に捉えながらトロント空港へ。やっと手足を伸ばせると思いきや、「カナダ」は我々の入国を拒むのか、上空旋回(1時間)の着陸待ち。前途多難な旅となるのか不安が過ぎりました。

「時差ボケ」とはどんなものなのか？ 考える間も無く視察が始まりました。各視察先の詳細は別記しているので省きますが、カナダの農業は、広大な国土(ほとんどは森と岩と湖)から想像していた通り、桁違い(2ヶ)な規模の経営体ばかりでした。個々の経営体をサポートする組織も確立されていて、国と各州と農業者を結ぶラインはしっかりしている様子です。日本の農協の様に多方面にわたるサービス提供はないが、それぞれの国の歴史の差違なのでしょう。

TPP に対する考えも聞けましたが、「日本とは良い話し合いができています」と言われ、相手にされて無い感じさえしました(所詮、大国対小国なのか?)。カナダの心配は地続きのアメリカとの関係にあるようでした。また、東部は多雨による湿害が顕著でしたが、自然を相手にする農業の苦勞に国境はないということで、それぞれの

風土の中で培われた物を大切にしながら、互いの立場を尊重していくことが、世界中の人の胃袋を満たすことに繋がるものだと考えました。今回、見た事・感じたことを今後の糧に頑張ります。

旅先で大切なのは健康と天候である。健康面は帰国後の体重増が物語っているし、全行程で頭に当たった雨粒は 2,3 粒、日差しに恵まれた視察となったことが何よりでした。

最後に、今回の視察参加にご助力頂いた全ての方に心より感謝すると共に、知り合えた多くの仲間のご健勝とご活躍を祈念し、締めさせていただきます。ありがとうございました。



サトウカエデの樹液(メープルシロップ)の採取風景

札幌農協 理事 澤田 孝

この度、第 38 回十勝農協連海外農業研修視察に、7 月 7 日より 11 日間の日程で参加し、貴重な体験をさせていただきました。今回は、カナダ(トロント・ゲルフ・ホランドマーシュ・レスブリッジ・バンクーバー)において、個人経営の農家を中心に視察研修致しました。

カナダは、ロシアに次ぐ世界第 2 位の国土面積を持つ国で、その広さは 998km² もあり、日本の約 26 倍にあたります。気候は北海道とよく似ていますが、湿度が低く、雨も少ないようで、今年は特に干ばつ傾向で、スプリンクラーが作動しており、水にお金がかかる国でもあるようでした。カナダは森林の国のイメージが強かったのですが、農業がここまで大規模に行われているとは、想像が付きませんでした。また、カナダは物価が高く消費税については 13%ですが、教育・医療等、社会福祉が充実している国でもあるようでした。

最初の視察先、シャープ農場(オンタリオ州ゲルフ市)では 2,400ha あまりの農地を保有し、小麦、大豆、コーンの栽培を行っており、飼料・種子等の販売を行い、また年間 2,000 頭あまりの肉牛の肥育販売を、本人と息子 3 人並びに従業員 60 人で行

っているとのことでした。農場内には大型の機械、トラックが整然と並んでおりました。また、今年 100ha の土地を 3 億円かけ購入し、規模拡大をしているようでした。

家族経営型酪農家においては、200ha あまりの土地を所有し、牧草・コーン等を栽培し、濃厚飼料以外はすべて自家製の飼料で飼育し、家畜の排泄物は自家のバイオガス発電施設で処理し、施設の製造費は 8 年で元が取れたと説明を受けました。

次の視察先であるゲルフ大学泥炭作物研究拠点は、湿地農業地帯であるホランドマーシュにあり、この地は昔、湖沼であったため排水が悪く、排水改良がこれまで盛んに行われてきているそうです。またホランドマーシュでは、野菜生産農家 125 戸で生産者協会が組織されており、国・州と交渉したり、販売・雇用の相談を受けているとのことでした。この地帯では主に玉葱・人参・セロリ等を作付けており、各農家が独自の販売網を持っていると説明を受け、感心致しました。

次の視察先であるアルバータ州レスブリッジに移動。ここでは、小麦・馬鈴しょ生産農家の視察でしたが、この地帯は十勝とよく似ている印象を受けました。小麦生産農家においては春播き小麦で十勝と変わらない収量なのに、価格が極端に安いのはびっくりしました。また馬鈴しょ生産農家では、一度に 6 条の畦を収穫出来るポテトハーベスターを使用していて、1 日約 11ha を収穫しているという話を聞いて、これにも驚かされました。馬鈴しょは収穫後、倉庫に入れ選別されて、フライドポテト・ポテトチップスの原料となるようです。



バンクーバーの街並み

カナダ生産者の TPP に対する意見は、経営体系によって賛否があるようで、日本のように、食糧を海外からの輸入に依存している国ではないからかもしれません。

カナダは本当に広い国でした、地平線までも伸びるまっすぐな道路と、脇に広がるキャノーラの黄色い花が心に残っています。貴重な体験をさせていただきました。

一緒に視察研修に参加された団長の菊地さん、副団長の石川さん、事務局、添乗員、団員の皆様には、大変お世話になりました。また、このような機会を与えていただいた札内農協、十勝農協連そして関係各位様に厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



女子サッカーW杯決勝戦が行われた BC プレイススタジアム

幕別町農協 理事 長崎 忍

この度、7月7日から17日までの11日間、第38回十勝農協連海外研修視察に参加し、カナダで研修を行って参りました。今回の研修では、管内農協役職員の方々総勢20名が参加し、東部はトロント、西部はカルガリー、そしてバンクーバーと回りました。日本からカナダへの移動は長時間で非常に疲れました。

到着したトロントでは、空港を出て高速道路を走りますと、合わせて22車線あり、沢山の車にびっくりさせられました。現地ガイドの説明によると、カナダでは高速は無料、高校まで学費無料、65歳以上医療費無料となっており、非常に福祉が手厚い国であるそうです。最初に訪れたトロントは非常にきれいな街でした。

視察先のゴルフ近郊の大規模農家では、肉牛2,000頭を飼養し、また2,400haの農地でコーン、大豆、麦を栽培し、大豆は日本に輸出しているそうです。一般的なゴルフ近郊の農家では、平均400～600haを所有しており、年収で1億円ほど、反収では2～3万円くらい稼ぎがあるそうです。酪農家では、搾乳作業の機械化が進んでおり、堆肥はバイオガスエネルギーに変換し、発電を行っていました。視察を通して、改めて外国の農業のスケールの大きさを思い知りました。なお、オンタリオ州の農家は約99%が家族経営で、鶏、牛、畑作等、全般を扱っているそうです。

またカルガリーはどこまでも続く、平坦で広大な土地が広がっており、作物は小麦、エン麦、なたね、デントコーン、馬鈴しょなどを栽培しているそうです。畑には明渠がない状態で、不耕起栽培を行っており、また全長500mもある巨大なスプリングローラーが設置されていました。

またカナダでは道路を走行中、沿道に多くのトレーラーハウスが見受けられ、休暇や家族サービスを大事にする国民性が窺えました。

今回の研修では、なかなか行く機会のないカナダを訪問し、各農協の理事や職員の方々との出会いもあり、非常に貴重な経験をさせていただきました。各理事や職員の方々とは、これからも色々な面で交流を深められればと考えております。

団長の菊地さん、副団長の石川さん、事務局の岡崎さん、ご苦労様でした。最後になりますが、各農協役職員、十勝農協連、また視察先の皆様には暖かく対応してください、心よりお礼と感謝を申し上げます。



工場跡地を再利用したモニュメント(グランヴィルアイランド)

幕別町農協 理事 植田 義隆

7月7日、帯広空港より成田経由でカナダに向かい、時差の関係で出発した日の2時間も早い時間に到着し、体がなかなか時差に慣れることが出来ずに苦労しました。しかし、いざ研修が始まると初めて見聞きすることばかりで、この時は時差も忘れることができたし、天候にも恵まれて有意義な研修視察をさせていただきました。

始めは規模も環境も違う国での農業には疑問を持ったり、納得がいかなかったりと戸惑っておりました。日本の農業でも十勝と他の地域、北海道と府県との違いがあるように、カナダでもそれぞれの地域によって農業情勢・天候・色々異なる中で、同じ国でも条件が違うことが、トロントからバンクーバーへ移動する中で実感させられました。両国の農業を考えると、農産物を生産することは同じなのですが、そこに至るまでの方法・考え方には大きな違いがあるように思いました。このような考えになったのも、今回の研修に参加させていただいて、話を聞き、視察させてもらえたからこそだと考えます。

十勝農協連海外農業研修視察に、8農協19名の役員・職員の皆さん、農協連の岡崎さん、添乗員の笠松課長と共に参加させて頂き、多くの方々と懇親を深めることができ、研修視察を無事終了されたことに感謝申し上げます。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えて頂いた、幕別町農協及び十勝農協連、関係機関各位にお礼を申し上げます。

十勝池田町農協 農産部 施設課 技術課長 松久 充

この度、7月7日から7月17日の11日間にわたり、第38回十勝農協連海外研修視察に参加させていただきました。私にとっては日本から出ることが初めてのことであり、また管内農協の役職員の皆様と研修を通して交流、情報交換することができ、貴重な体験をさせていただきました。また私ごとですが、研修中、予期せぬトラブルがあり、その際、菊地団長のご厚意に甘えさせていただく形となり、大変お世話になり感謝申し上げます。

さて、今回視察先のカナダですが、総農地面積は日本の15倍程度あり、人口は日本の4分の1程度の3,300万人とのことです。カナダ東部に位置するオンタリオ州は主要な農業州で、視察先の農業連合では会員農家戸数が約37,000戸であり、国内でも最大の組織であるとのことです。

カナダではトウモロコシ・馬鈴薯・小麦・キャノーラ(菜種)・大豆・野菜園芸が主要な作物で、その他にも酪農が盛んでありました。広大な農地を所有する農家が多く、中には3,000haを超える農家もあり、播種や農薬散布、収穫作業など、また約3,000万円位のトラクターや作業機など、十勝とはスケールの大きさが違いすぎて、ただただ、驚かされるばかりでありました。日本の農家では日々、早朝から暗くなるまで畑の管理作業をして、日々所得確保に向け努力を重ねていますが、ここカナダでは、広大な農地での管理作業をしている光景は見られませんでした。質よりは量といった所でしょうか…。

今回の研修では、文化・風土・食等の違いを肌身に感じることができました。この経験を活かしながら、農協職員として、知識の向上に努めて参りたいと思います。この研修に参加させていただいた十勝池田町農協並びに、関係各位、農協連の岡崎様、農協観光の笠松様には心より深く感謝申し上げます。



バンクーバーでの会食

陸別町農協 理事 川初 博司

この度の研修視察でカナダ(トロント・ゲルフ・レスブリッジ・バンクーバー)に 11 日間の日程で参加し、大変貴重な経験をさせていただきました。日本からの移動は約 12 時間もかかり疲れてしまいましたが、現地地の農業者から直接お話を聞くことができ、充実した研修視察となりました。

カナダの総農地面積は日本の 15 倍もあり、土壌も肥沃な農業大国であります。広大な土地には見渡す限りキャノーラ(菜種)・コーン・大豆・馬鈴しょ・草地が広がっており、カナダ農業の雄大さを見せつけられました。

訪問先の農場では、ご主人やご子息達が出迎えてくれ、カナダの農業情勢や農場経営について話を伺いました。どこの農場でも、家周りの広い芝生は見事に手入れされており、カナダの農業者の几帳面な部分を垣間見ることができました。また農場内を見回すと、大型のタワーサイロや作業機が数多く見受けられ、車庫内ではこれから迎える収穫作業のためハーベスターが整備されておりました。なお、収穫された穀物または牧草(ルーサン・チモシー)は日本にも輸出されているそうです。

今回の研修を通して、カナダの農業は日進月歩で大型化が進んでおり、いずれ日本の農業にも大きな影響を及ぼすであろうと感じました。

最後に、研修に参加させて下さいました陸別町農協および十勝農協連関係者各位には、心より感謝とお礼を申し上げます。大変ありがとうございました。



スタンレーパークにて

十勝農協連 農産化学研究所 主幹 岡崎 智哉 (事務局)

日本を出国してから約 12 時間、地球のほぼ真裏、トロント空港に到着しました。最初の研修地ゲルフでは、気候的には北海道と同じで、過ごしやすい初夏の季節であり、町並みを見回しても、自然と建造物がちょうどよいバランスで調和しているあたりは、十勝とよく似た雰囲気を感じました。カナダに到着して驚いたことは、日中の時間の長さで、朝は 5 時くらいから陽が昇り始め、夜は 9 時になってようやく

く暗くなり始めます。13時間の時差と日中の長さが災いしてか、カナダに着いてからというもの、時差ぼけがしばらく治らず、夜中は数時間おきに目が覚めるため、慢性的な睡眠不足に悩まされました。

視察研修では大規模農場や家族経営の農場など、様々な視察先を訪問させていただきました。大規模農場では2,000haの畑であったり、7,000万円のハーベスターであったり、これでもかというくらい、スケールの大きさを見せつけられました。一方で、家族経営の農場では、約20haの土地で有機野菜を生産しているなど、十勝ともあまり変わらない生産規模に親近感を覚えました。

また研修中、各地域の農場を訪問しましたが、移民国家だけあって、そのルーツは様々です。ゲルフ近郊の酪農・畜産農家はイギリス系、ホランドマーシュの野菜生産農家はオランダ系、ナイアガラのワイン農園はイタリア系といったように、多種多様な農業形態が入り交じっており、同じ国にしながら、ヨーロッパ諸国の農場風景を随所に見受けることができました。このようにカナダの農業は、単にスケールが大きいだけの大規模農業とは異なり、移民の持つ文化や技術を取り入れてきた歴史があるため、多様性のある農業が展開されていました。

多民族国家といえば隣国のアメリカもそうですが、人種・文化の多様性について、アメリカは「人種のるつぼ」と例えられるのに対し、カナダは「人種のサラダボウル」と表現されます。「るつぼ」は異なるもの(文化)を混ぜ合わせることで新しいもの(共通文化)を生み出すが、「サラダボウル」はそれぞれの野菜(文化)は異なるものの、互いが共存共立している。まさにカナダの文化や農業を象徴するにふさわしい表現だと、研修を終えて納得しました。

最後に、今回貴重な研修の機会を与えていただきました関係各位の皆様、また、研修中、頼りない事務局をサポートしていただきました団員・添乗員の皆様には、改めて深く感謝申し上げます。



成田到着後、ホテルにて最後の晩餐

VI カナダ農業の概要

※ 内容は農林水産省 HP から引用しています。

1. 概要

- カナダは、広大な国土を有するものの、そのほとんどが森林、湖沼、山岳等であり、国土に占める農用地面積の割合はわずか6%である。また、北部は寒冷な気候で農業生産に適していない。それでも、米国との国境付近を中心に6千万ha以上の農用地を有している。
- 小麦、大麦、菜種のほか、畜産物(牛肉、豚肉、乳製品)の生産が盛ん。特に菜種は世界第1位の生産量である。
- 農用地の約8割をアルバータ州、サスカチュワン州、マニトバ州が占めており、これらの州で小麦、大麦、菜種の大部分が生産されている。

2. 農林水産業の地位(2012年)

(単位：億 US ドル、%)

	カナダ		日 本	
	生産額	GDP 比	生産額	GDP 比
国内総生産(GDP)	18,214	-	59,602	-
うち、農林水産業	264	5.8	692	1.2
1人当り GDP(USドル)	52,283		46,838	

資料：国連統計

3. 農地の状況(2011年)

(単位：万 ha、%)

	カナダ		日 本	
	面 積	比率	面 積	比率
国土全体	99,847	100.0	3,780	100.0
農用地	6,260	6.3	456	12.1
耕地(永年作物地除く)	4,297	4.3	425	11.2
永年作物地	493	0.5	31	0.8
永年採草・牧草地	1,470	1.5	-	-

資料：FAO 統計

4. 主要農産物の生産状況

(単位：万 t)

	カナダ					日 本
	2008	2009	2010	2011	2012	2012
小 麦	2,861	2,685	2,317	2,526	2,701	86
大 麦	1,178	952	761	776	801	17
とうもろこし					1,170	
大 豆	334	351	435	425	487	24
菜 種	1,264	1,289	1,277	1,416	1,541	0.2
牛 肉	129	125	127	115	120	52
豚 肉	195	194	193	197	200	130
牛 乳	814	821	824	840	845	763

資料：FAO 統計

2. 農林水産物貿易の概要

カナダでは、農業は重要な産業であり、特に菜種、菜種油は世界第1位の輸出額であり、ともに世界の輸出額の約4割を占めている。

(1)輸出入農産物上位5品目(2011年)

(単位：百万 US ドル、%)

輸 出			輸 入		
品目	金額	シェア	品目	金額	シェア
小 麦	5,742	14.0	調製食料品	2,021	6.5
菜 種	4,645	11.3	ワイン	1,916	6.2
菜種油	3,194	7.8	ペストリー	1,059	3.4
豚 肉	2,286	5.6	骨なし牛肉	865	2.8
大 豆	1,446	3.5	チョコレート	856	2.8
総 額	41,042	100.0	総 額	31,000	100.0

資料：FAO 統計 注：林・水産物を除く

(2)日本との貿易(2013年)

我が国からのカナダへの主な輸出品は、乗用車、自動車部品等の工業製品が中心であり、カナダから我が国への主な輸入品は、石炭、菜種、製材・加工材、豚肉等の資源・食糧が中心である。

※農林水産物貿易概況

(単位:百万 US ドル)

	輸 出 (日→カナダ)	輸 入 (カナダ→日)	我が国の 収 支
総額・・・A	8,695	11,971	△3,276
農林水産物・・・B	62	6,053	△5,991
農林水産物の割合・・・(B/A) %	0.7	50.6	-

資料：財務省貿易統計

※貿易農林水産物上位 5 品目

(単位: :百万 US ドル、%)

日本→カナダ			カナダ→日本		
品目	金額	シェア	品目	金額	シェア
ゼラチン	4.4	7.1	菜 種	1,577	26.1
ごま油	4.3	7.0	製材・加工材	978	6.2
アルコール飲料	4.1	6.6	豚 肉	767	2.7
ソース混合調味料	3.5	5.7	小 麦	626	10.3
緑 茶	3.3	5.2	大 豆	318	.2
総 額	62	100.0	総 額	6,053	100.0

資料：財務省貿易統計



ホランドマーシュ野菜生産者協会にて

